

新党結成と野党の合流分裂で安倍一強継続

第48回衆議院選挙は何を残したのか



(司会) 相内 俊一

小樽商科大学
特認名誉教授



山本 武史

北海道新聞社
道政キャップ



山本健太郎

北海学園大学
法学部准教授



吉田 徹

北海道大学
法学研究科教授

1 再び突然の解散、新党への 民進党合流と分裂

相内 一〇月の衆議院選挙について座談会をはじめます。今回の解散総選挙は突然だったとの声もありますが、私は首相の解散権を考えればいつ選挙があってもおかしくなかったと思います。

準備ができていなかったのはメディアと野党だと思いますが、その野党の対応をどう考えるか。そのなかで突然登場した希望の党とそこへの合流を決めた民進党の行動様式と思考様式をどのように評価するのか、同時に小選挙区制の下で多数の議席をとるための戦術的、戦略的な側面について討論していただきたいと思います。

今回は民進党の合流によって希望、立憲民主、無所属の三つに分かれて選挙することになりました。その中で労働組合の連合は、希望と立憲の候補者を応援しましたが、違う方向を向いている政治集団に対して、連合は何をしようとしていたのでしょうか。また、選挙のために必要としている政党システムはどう考えるのか、このあたりが論点になると思います。

さらに、野党共闘を含めた北海道の選挙を総括しつつ、日本政治のなかで政党をどう考えるか、どうすべきかについても触れていきたいと考えています。最初に総論的なところで、メディアは解散に驚いたと思うのですが、選挙はもう少し先と予想していたのでしょうか。

行政府優位のなかでの七条解散乱発 想定した三つの時期で最も早い解散

山本キャップ 私たちは安倍晋三内閣の支持率が低下しているなかで、解散選挙をしても憲法改正の発議に必要な三分の二は維持できないと考えていた。そのリスクを冒してまで解散することはないだろうとみていました。来年九月の総裁選を経た上で解散、というシナリオが最もあり得ると考えて

いました。

吉田 解散のタイミングとして想定されていたのは、選挙区割りの変更周知期間が終わってから、来年の総裁選までの間のどこかだろうとみられていたが、そのなかで一番早いタイミングでの解散でした。ただ、それが可能になったのも、憲法七条に基づく解散、つまり首相の解散権が自由に行使できるからです。七条解散と選挙時期は密接に関係しています。

行政府の長である首相が政権に有利、党に有利なタイミングで解散できることは、立法院と行政府の均衡を考えた場合は望ましくなく、従って七条解散は制限すべきだとの意見が今回多く出されました。立憲民主党は、七条解散を制限するための憲法改正を公約のひとつに掲げていたほどです。

ただこれは、野党びいきな見方でもあって、一方で、解散権を首相が持っていることは、行政府の求心力を保証し、与党議員の造反を抑え、さらに野党も常に政策・組織を準備しなければなりませんから、院内政治に緊張感をもたらす効果もあります。行政府と立法院のバランスをどうとつていくのかという観点から首相の解散権は議論される必要があるでしょう。

この行政府と立法院の関係は、安倍一強政治の源泉とも関わりますが、九〇年代の選挙制度改革、さらに橋本龍太郎内閣の行政改革は基本的には行政府優位の議会制民主主義を作ろうということを用意したものでした。

考えてみれば、小泉純一郎政権も安倍政権も、首相のキャラクターは全く違いますが、小選挙区

制を前提に集権的な党運営を実現して、官邸主導でもって官僚機構を掌握できた点を共通点にしています。つまり、選挙区制度改革と行政改革の効果を上手に使っているところが政権安定の基盤になっていて、立法院に対して行政府優位なたちが過去四半世紀進んできたことの結果が七条解散の乱発につながっているのだと思います。

問題は、解散のやり方にあつたのではないでしょう。安倍首相が解散すると決めて、政府と連立相手の公明党だけに伝え、マスコミがその情報を伝えるなかで、記者会見もせずに国連総会へと飛び立ってしまった。外交の側面からみると、選挙直後には日米会談が予定されていました。国会論戦が本格的に始まる前に、メディアは日米会談に焦点を当てますから、支持率が高いまま国会開幕を迎えることになる。先進国首脳会議やプーチンとの首脳会談なども同様ですが、外交を上手に使うと、内政をコントロールするのが安倍政権の特徴的な部分なのでしょう。それが今回の総選挙でも発揮されたと思います。

相内 そうすると、安倍政権の持っているしたたかさ、計算ができる側面ということですね。内閣の支持率イコール首相の人気と読み替えれば、安倍首相は与党のなかでリーダーシップを発揮でき、特に選挙という状況を作ること、党内を強くコントロールできるようになっていたのは事実です。

こうしたことは野党も予知できていなければならず、いつ解散されてもよいように対抗軸になる政策を準備しておく必要があつたと思うのですが、

山本先生はどう見えていますか。

山本 今年の夏以降、解散のタイミングは三つしかなく、一つ目は今回のタイミングで、二つ目は通常国会が終了したとき、三つ目は来秋の総裁選終了後の任期満了に近い時期しか元々なかった。専門家は最も可能性が低いとみていた一つ目の解散なので驚きが広がりましたが、三つしかない選択肢のなかでの解散総選挙でした。

ただ、気になる点は、もし、大方の見方のように総裁選後に解散選挙となつた場合、野党の準備が今回以上に整っていたかと言われるれば、私は悲観的で、同じような状況になつたのではないでしょう。小池百合子さんが手を挙げるのが遅くなると句が過ぎていたでしょうし、民進党が前原誠司体制の下で支持を積極的に回復できる手を打てたかという点、難しかっただろうと思います。離党者が相次ぐ悲観的な状況で選挙を迎えた可能性が高かった気がします。その意味では、今回の解散で泡を食つたのは専門家で、野党ではない気がします。

小池劇場・希望の党の反作用 安倍一強を許し立憲民主党ができる

相内 個人的には、希望の党に対しては詳しく議論する価値があると考えていませんが、メディアはいわゆる「小池劇場」のような政治展開をどのように捉えていたのでしょうか。

山本 キヤップ 個人的な感想になりますが、当初は端的にこれは面白くなつたと受け止め、期待

もしました。政権交代につながるようなかなり大きな変化が生まれるのではないかと思います。

結果として希望の党は失速していきしましたが、功罪両面があると考えています。罪という点では結果的に安倍一強を許してしまったこと、安保関連法に反対していた議員が、同法を事実上容認する政策協定書に署名して入党するという「踏み絵」問題が頻繁に報道され、若い人を中心に政治不信を増幅したのではないか、「政治家はこんなものか」という印象を与えてしまったのではないかと懸念しています。

一方、功の部分があるとすれば、結果的に民進党候補が希望の党と立憲民主党、無所属に分裂したことで、山本先生が道新インタビューでお答えいただいたように、二〇一二年からの五年間、民主党政権の失敗を引きずったまま支持率の低迷が続く民主党の「負」の部分の払拭するきっかけとなったと思います。

今後、この動きが吉とでるか凶とでるか分かりませんが、ひとつ歯車をまわしたというか、「安倍一強対弱小野党」という膠着した状況を動かすきっかけになった点は、評価できると思います。

相内 それは「鶴」のような存在だった民進党の姿がはつきりしたということでしょうか。私は今回の一連のプロセスは最初から小池と前原が通謀して仕組んだことで、右派左派の分水嶺で候補者を選別浄化しているのではとの印象を報道から感じていましたが、山本先生はどうでしょうか。

山本 希望の党へ民進党が合流する話の主役は小池さんと前原さんですが、お二人は基本的に違

うことを考えていたと思います。最初は、二人でもう少し戦略を練って、先々を見越して行動した結果、民進党と希望の党の合流につながったと思っていたのですが、それは私の読み間違いで、実は違っていた。

小池さんは基本的に条件反射で短視眼的に自分にとってベストの道を選んだ結果、最終的に九月の終わりに衆院選に出馬しないと決めて、希望の党は坂道を駆け落ちてしまったという感じですよ。

一方、前原さんはもう少し物事を戦略的に考えていたのではないかと思います。正しいか間違っているかは別として、古典的なダウنزモデルに忠実な合理的な行動をとろうとした。それは自民党より少し右に立つ政党を作って、共産党よりも左側の広いゾーンを全て取りに行くのが前原さんの基本的な考えだった。ですから、「寛容な保守」を訴える希望の党に民進党は丸ごと合流する選択になったのだと思います。

ところが、小池さんは「寛容な」保守ではなく、保守の部分以外は排除されたので立憲民主党が誕生し、民進党丸ごと合流は根底から崩れてしまい、後に残ったのは自民党と組むかもしれない、反安倍だが親自民という何ともわかりにくい立ち位置でした。さらには小池さんも出馬しないことになってしまった。

前原さんは希望的観測で動かざるを得ない状況に置かれており、小池さんも戦略を共有していると思っていたら全然そうではなかった。あるいは小池さんは前原さんと違う方向を見ていた。それが今回の騒動の背景だと思っています。

希望の党の失速と敗北

相内 一部で反安倍、アンチ安倍勢力の結果がでていたと思うのですが、それとは別に、政権政党である自民党をどう評価するかという、全く別の次元の問題がありました。

そして、希望の党が出てきて、民進党が合流するという話が出てきたとき、希望の党はできたてはやはやで、コアメンバーもわからない、どこを向いているのかさっぱり分からない政党に民進党が全部行くということは、数の論理で言えば乗っ取りです。そうなることを小池と前原のどちらも分かっていたなかななどということがあるのでしようか。

吉田 民進党が希望の党に合流することになったのは、互いに必要なものを互いが持っていたからでしょう。

民進党は過去のイメージを払拭したいし、野党共闘で逃げていく保守票も欲しい。安倍一強が揺るがないなかで、唯一反転の手がかりになるのは小池都知事しかいなかった。一方、小池都知事の方は、お金もなければ組織もない、候補者もない。それを持っているのは民進党と連合でした。

つまり、お互いに必要なものを持っていて、最初は理性の結婚だと双方は思っていたものの、始めてみたら結婚生活がうまくいかなかったということでしょう。

構造的に見れば日本の野党は、自民が下野した一九九三年以降、「新自由主義の極」と「社会民

主義の「極」にずっと分裂してきました。その時々
の状況によって、どっちが強くなるか、どちらが
吸収するかはいろいろでした。たとえば、二〇〇
二年の民主と自由の民由合併は、社民の極が新自
由主義の極を吸収した局面でした。二〇一二年に
日本維新の会ができて、新自由主義へのゆり戻し
が野党陣営のなかであり、その後、維新が分裂し
て、結の党と一緒にたつて維新の党となり、民進
党に合流したことで、さらに社民の極が強くなっ
た。その反動が、新自由主義の極としての希望の
党の結党でしょう。

先ほど、相内先生は民進党が鶴的とおっしゃっ
ていましたが、自民党の派閥も清和会から宏池会
まである鶴的な政党です。自民党と同じようなモ
デルを野党のブロックのなかで作らざるを得ない
のが小選挙区制のロジックです。もし政権交代を目
指す野党を作るのであれば、社民の極と新自由主義
の極の両方を包摂できる様式や戦略が不可欠です。

今回、それを民進党と希望の党が試みたものの、
結果的に上手くいかなかった。ただ、構造的には、
過去の野党再編と同じことがまた繰り返されたに
過ぎない。

もう一つ、プロセスでいうと、小池都知事が結
局、衆院選に出馬しなかったことが希望の党失速
に大きく影響したはずです。パッチワーク的な公
約や「排除の論理」も作用したでしょうが、最後
の最後に小池都知事自身が出馬しなかったことは、
この選挙では勝負しないという意味で、この時点
で希望の党の失速と相対的な敗北は予定されてい
たのだといえるはずです。

見えていた敗北のシナリオ

相内 なるほど、山本さんはどうですか。

山本 巷間では「排除」発言がターニングポイ
ントだと言われますが、私も吉田先生と同じ考え
で、総大将の小池さんが衆院選に出ない上、代わ
りになる人もいなかったことが敗北の原因とみて
います。

小池さんは意図的に代わり得る人を遠ざけてい
た節もあって、一番重用していた若狭勝さんは、
議員としての経験が少なく、候補者調整の場では、
自身の政治塾などから擁立した候補者にこだわっ
た結果、野党乱立に繋がってしまった。

必ずしも有能とは言い難い人を重用していたこ
とに象徴的に表れているように、小池さんは自ら
に代わりうる有力な政治家をあえて遠ざけてきた。
例えば、小池さんが衆院選に出馬し、代わりに都
知事になる有力候補者がいれば結果は変わった可
能性がありますが、いなかった。都知事に残るこ
とになれば、誰かを衆議院選に出す必要が出てき
ますが、そういう人もいない。その状況になった
時点で、政権選択の選挙という言葉が空虚になる
わけで、敗北のシナリオが見えていた気がします。
半ば冗談のような話ですが、橋下徹さんと小池
さんは頻りに話をしていた節があり、私は橋下さ
んを衆議院に出馬させ、首班指名で担ぐのではと
疑っていましたが、そこまでの気持ちも橋下さん
に無かったようですし、小池さんも説得する気持
ちは無かった。要するに小池さんが一匹狼である

こともこの騒動が興ざめしてしまった要因だと思っ
ています。

相内 メディアの側から一連のプロセスをみて
どうお考えでしょう。それと今後、希望の党は生
き残れるのでしょうか。政党としての活動をつづ
けていくために党員や傘下の議員を増やしていく
エネルギーとシステムを持っているでしょうか。

山本 キャップ メディアを含めて、有権者も振
り回されたという印象を持っています。先ほど申
し上げたように、安倍政権に対する不満が溜まっ
ていたなかに、希望の党が出てきて一時期待感が
あったのは間違いないと思います。その後の失速
の仕方は、落胆が落胆を呼ぶようなかたちになり、
どんどん悪い方に流れていった気がします。その
過程で誕生した立憲民主党は希望の党と対照的で
した。

希望の党の生き残りはかなり難しいとみていま
す。まず、小池さんに対する求心力がかなりなく
なり、むしろ遠心力が働いていますし、北海道を
はじめ地方に足がかりがない状況で、いまから組
織として作り上げるのは、かなり難しいのではな
いかと思っています。

民進党は合流以外の選択はなかったのか 一発逆転を狙った失敗

相内 すこし観点を变えて、民進党は希望の党
への合流以外に選択肢はなかったのでしょうか。
今後の野党の行く末を考えた場合、民進党の選択
はどう評価できるのか。

私は民進党と希望の党の合流には相当驚きました。そして政権選択という観点から、反安倍を争点にして仮に政権を取った場合、どうするつもりも見えてこなかった。山本さん、民進党のこの動きをどう評価できますか。

山本 冒頭でも申し上げましたが、今回希望と合流しなかったとしてもジリ貧だったという前原さんの言い分には一定の合理性があると思います。他方、黨員と地方組織を全く置き去りにして、トッブダウンではかの政党に身売りするというのは常識では考えられない選択です。

ただ、民進党が新しい選挙に挑む態勢を作るのは、こういうかたちしかなかったといえます。選挙が迫ってどうしようもないぎりぎりの状況になって、初めてトッブダウンで物事を決めて、後に立憲民主党に行った人も一旦は合意したわけですよ。

物事を決められない政党が最後の最後に詰められたところで、強引に物事を決められた、むしろ決めてしまった。民進党の決められない文化の象徴ともいえますが、ほかに選択肢があったかといわれると、無かったから前原さんの提案に一旦は党内の大勢が合意したということになるのではないのでしょうか。

相内 吉田さんはどう考えていますか。

吉田 たらればですが、結果的に希望の党の相対的な敗北から合流の選択は間違いだつたと総括されていますが、そもそも希望の党への民進党の合流がなければ立憲民主党もなかったわけですから、どう判断するかは難しいと思います。

二〇〇七年に当時の福田康夫首相と小沢一郎民主体代表による大連立構想があり、民主党役員会で猛反発され実現しなかったという出来事がありました。が、政党が一発逆転を狙うと上手く行かないということではないのでしょうか。とりわけ、全国的な組織を持つている政党でこうした手法は上手く行かない。

民主党時代から見ると、いくつか重要なシークエンスがありました。二〇一二年の選挙では日本維新の会からの猛追を受け、それでも野党第一党の地位を守った。そのまゝ二〇一四年の選挙では何とか持ちこたえ、この第二のシークエンスから民主党は反転攻勢に出たかったのだと思います。ところが、連舫代表の下でこれも不発に終わってしまった。

民主・民進党の蓄積を捨てる

吉田 政党が有権者市場に入っていく場合、「マーケット・イン」と「プロダクト・アウト」というマーケティング用語に類することが出来ます。「マーケット・イン」は有権者市場で最適な地位を占めるという考え方、「プロダクト・アウト」は政党として魅力的な商品、つまり政策を提示することで、新たなマーケットをつくって票を獲得していく考え方です。民主党はマクロ経済政策が弱いと指摘されてしまったので、代表を目指した前原氏は財政学者の井手英策さんをブレンに、それに類するものを作って、安倍政権がそのままコンセプトを踏襲するほどのプロダクトを作りました。

この「プロダクト・アウト」路線でこれから攻めようとした矢先に、過去数十年間、あるいは二〇一二年から数年間かけて展開してきた経緯を無視して「マーケット・イン」の路線に乗り換えた結果、自滅をしてしまったことは厳しく評価されなければならないと思います。

相内 結局、民進系が選挙に際して、体系だった政策を示せなかった。政策を考えると、今のポジションニングの問題と、打ち出す政策の魅力の問題の両方考えるにしても、政党は政党自体のミッションが必要であり、中長期的な実現可能性のあるビジョンを示さなければならぬ。ミッションに適ったビジョンを打ち出し、それに向かって戦術、戦略を立てる地道な仕事の蓄積がないと、選挙で出てくるのは脈略のない争点だけになると思います。

たとえば、森友・加計問題と言っても、この問題を全体のビジョンのなかでどう位置づけているのか全く分からなかった。大きな争点の組み立てとして社民的な価値、新自由主義的な価値は共存できないので、どちらが優位にあるかだけになる。政党としてのミッションを掲げてビジョンを示すという意味で鮮明なのは共産党しかありませんでした。

自民党は目先の利益、現世御利益で生き残っている政党ですが、あるべき社会の理想に向かって活動する政党は自民党のようにはできない。体系だった政策づくりを含め、今の野党に何が必要なのでしょう。

吉田 綱領主義的あるいはイデオロギー的な政

党は世界を見回しても、もはやほとんど存在していないか、それに固執する政党は没落していつている状況です。社民に限った場合、どの国の選挙でも、近年は社民政党の衰退が目立ちます。

ヨーロッパでは極右ポピュリスト政党の躍進が目立っていますが、それ以上に深刻なのは社民勢力の凋落です。ドイツ、フランス、オランダも旧来の社民政党は歴史的な敗退を経験しています。その理由の根底にはポスト工業社会への動きや、そこから来る人々の働き方の在り方が変化していることがあるでしょう。固い支持基盤を持っていた、そこから綱領的なものを作り上げて政権を奪取する、というわれわれが思い描いている政党政治のあり方は過去のものになりつつあります。

二大政党制や二極ブロックの政治はどういうものかといえば、政権与党が転ぶのを待つという政治です。相手の失敗を待つ「柵からぼたもち」の時に受け皿を作っておかなければならない。次は、その受け皿作りのシークエンスでなければなりません。

相内 確かに、一九九七年のイギリスブレア政権の誕生は正にそうでしたが、そうだとすると立憲民主党の行く末をどう考えられるでしょうか。これについては、労働組合依存の選挙態勢をどう変えていけるのかという問題と一緒に時間があれば議論していただきたいと思います。

有権者は何を基準に投票したのか

相内 次に、今回の選挙で政策論争はあったのか、あつたとすれば争点は何だったのかについて伺います。メディアはどう見ていましたか。

山本キヤツプ 報道のなかでは政策論争をあまり感じませんでした。

相内 メディアも各政党の政策を対比させて書きづらいつた状況だったのかなと思いますが。先ほど吉田先生が言われたとおり、すっきりとしたパッケージの政策綱領を持っている政党はなく、入り組んでいる。ある政党は反原発で、ある政党は原発推進だけどりべラルな主張があるなど、様々なところで政策や考えが入り組んでいて、よく分からない状況だった。

今回の選挙を有権者は何をもって選択したのか。政策で選択したのでしょうか、山本先生はどう見ているのでしょうか。

山本 そもそも解散権を自由に行使できる下の選挙なので、政策が争点になる選挙が頻繁に起きることではなく、政権与党は自分たちに有利なタイミングで解散するので、どうしても政権に対する評価、業績評価を基本にした選挙になることが一般的です。

今回は加えて、新党が二極の一方の主役として出てきて、しかも、新党ができて一週間で選挙戦がはじまったので、果たしてそれぞれの政党の政策がどういうもので、それがどのように練られているか有権者に伝わらないまま選挙戦に入ってしまった。

選挙戦に入るとメディアは政策のプロセスなどを追えなくなるので、表面的に公約集、マニフェストに書かれていることしか報道できないため、

政策を掘り下げる以前の段階で選挙になったという印象です。

もともと安倍さんは政策を選挙の争点にするつもりもなかったですし、なりにくいという構造に加え新党が主役になったので、二重に政策論争が低調になってしまったと思います。

相内 業績評価についても、たとえば一〇〇〇兆円に及ぶ国の借金をどうするかという問題は完全に争点回避されましたよね。集団的自衛権についても、選挙が終わった直後に日本版海兵隊の話が出るなど、選挙中に取り上げられたい問題、野党の側がイデオロギー暴露をするかたちで、政権が取り上げたくない争点を出して選挙を戦うことがあつてもよかったと思うのですが。

森友・加計問題は選挙争点だったのか 与野党の対立軸をつくった立憲民主党

山本 森友・加計問題が目立ちすぎて、政権を攻撃するにはそこだと野党もメディアも集中してしまつた。森友・加計が安倍政権のアキレス腱なので、ほかの問題で難しい話をして有権者が理解困難となるなら、分かりやすい森友・加計問題で押した方がいいと選挙戦術上考えたのでないでしょうか。

相内 政権攻撃にはなるでしょうが、政権与党に対する批判には結び付きにくいのではないのでしょうか。安倍首相に一票入れる選挙ではないので、政党選択ないし政党の候補を選択するなかでは、



あいうち としかず 氏

ほとんど効果がなかったと思うのですが。

吉田 政策といえるかは分かりませんが、対立軸を作ったのは立憲民主党です。特に集団的自衛権、安保法制は、一般有権者でもわかりやすい対立軸となり、立憲民主党の底上げにつながったのは間違いないと思います。

一方、経済政策で言えば野党の側に、今のアベノミクスの補完的な政策ではなく、代替できるような経済政策があるかと言われればなかったのも事実です。

そもそも、アベノミクスは、金融政策も財政政策も構造改革も全て入っていますから、何も言っていないに等しいといえます。ただ、自民党はそれをパッケージングできているので、力点を変えることで、かなり柔軟に政策を打ち出すことができます。これを超えるような政策は考えにくい。かつて民主党の野田政権のとき、経済財政担当相だった前原さんは、日銀に金融緩和を求めたという経緯もありました。つまり、経済政策のメニューは、やはりどうしても似通ってしまうということ



やまもと たけし 氏

です。

憲法問題は対立軸になりますが、それだけで多数派はとれない。多数派が関心のある経済政策では、アベノミクスに代わるものがない。その不整合が、野党の弱さにつながっています。

山本先生も言われたように、日本の選挙は公職選挙法、放送法、選挙期間の問題などを含めて政策論争がしにくい、深めにくい構造になっています。今回は政策論争をさせない解散選挙だったという側面もありますが、日本の政治の環境整備を踏まえて議論することが必要ではないでしょうか。

相内 そうすると先ほどの疑問にもどりますが、有権者は何を手がかりに投票したのか。北海道は比較的分かりやすかった気はするのですが。

山本キヤツブ 森友・加計問題に対する安倍首相の対応を含め、安倍政権に対しての好き嫌いの感情は判断材料の一つであったことは間違いない、投票行動を大きく左右したと思います。

若者の高い自民支持と希薄な反権威主義

相内 アベノミクス批判をしても効果がない上、野党も代替案を出せない。しかも選挙期間中に日経平均株価がどんどん上がり、政府は景気昂揚感みたいなものを演出し、景気・経済のポジティブイメージがあった。野党にかじ取りを任せてはとんでもないことになる、と与党は危機感をあおります。

こうしたなかで、政権与党の自民を支持する行動は自然に起こりやすい。結果として、若い世代の自民党支持率が高めに出ているのも、こうした文脈で読み取っていいでしょうか。

吉田 先ほど、相内先生が反安倍と反自民は違うと述べたのは重要な指摘だと思います。反安倍だけど、反自民ではない人たちが票を相殺した面があるかもしれません。

政策上の選択を問われているものがない状況では争点で投票しようがない。残ったのは、反安倍とか小池旋風とか表層的なものでしか投票しようがない。そうした意味では政治不信を高めることになったかもしれない罪深い選挙ともいえ、投票率が低かったのも当然です。

それを踏まえて、若者の自民党支持は、前回の参院選から注目されていきました。それが本物なら、これは大きな政治変動の予兆だと思います。若年層の自民党支持の理由の一つは雇用の改善があります。有効求人倍率は全都道府県で一倍を超えています。若者にとつて雇用や就職は人生の大問題で、これは日本社会の問題点でもあります。新

卒一括採用と正規と非正規で雲泥の差がある労働市場を考えれば、雇用情勢に敏感たらざるを得ない。そうするといま目の前に求人があるかが若者にとって政治との接点になるわけです。そこをきちんと手当てしてくれる自民党がいい、というのは自然だともいえる。

もう一つは、若者であればあるほど権威主義的、正確に言えば反権威主義の性格が薄れるというのは日本の意識調査でもはっきりしていて、さらに世界的な傾向ともされています。この特徴は立憲民主党の得票構造にはつきり出ていて、立憲民主を支持する割合が多い五〇代、六〇代は反権威主義的意識を持つ層で、反自民政治の供給源になっています。

ただ、若者になればなるほど、反自民、反権威主義の意識は薄れていきます。高知大学の遠藤昌久さんらの最近の調査では、二〇代の若者は民進より維新がリベラルで、自民より公明の方が保守的だと考えている結果が出ています。

つまり、若年層の頭のなかの政治マトリックス



やまもと けんたろう 氏

は変わってきているのではないのでしょうか。社会学ではいろいろな仮説が出されていますが、将来の状況や見通しが不安定になると、人間は権威主義的傾向を強めます。状況が不安定なときは自分の判断で選択するよりも、その状況に適応できている強いものに従う方が合理的で、かつ安全だからです。

先進国が低成長時代に突入して、働き方が大きく変化し、さらに分配のパイも小さくなってきている現代では、反権威主義的な傾向が薄れ、これが若者の自民党支持に転換されている部分はあるのではないかと思います。

若者に政治的価値をどう伝えるのか

相内 そういう意味では現状肯定的な行動で、かつて一億総中流意識ができてきたころから、若者に限らず国民全体にその傾向がありました。こういう状況がつけば、若者層の投票行動はこうなると予測されたはずなので、選挙以外の場で別

の政治的価値を示していくきっかけは何かがあるのでしょうか。

最近、中学生の主権者教育の依頼を受けたりすることがありますが、どう教えるべきか悩んでいます。私がいくら話をしても、彼らに政治的価値についての情報が全然届いていないような気がします。こうした活動は政党が行うものではないかと考えるのですが、山本さんどうですか。

山本 情報が届いていないのは同感です。高校に出前授業に行つて政策とは何かと説明しても、基礎となる情報を持っていないので、「砂漠に水をまく」という感じです。では、だれが情報を植えるのかという問題ですが、中学や高校の教育現場は中立性を過剰に気にしているため、政党が関与することは嫌がると思います。

私が例え話としてよく使うのは、サッカーを知るのに、オフサイドルールを一生懸命教えるより、まずゲームを見ようというのと同じです。でも実際の教育現場はゲームを見るのは中立ではないから駄目だという。これでは情報が届くはずがありません。

自身の判断力があるから一八歳に投票権があるのであって、教員が偏ったことを言っても判断力があるという前提がなければ、選挙権を与えるということ自体がおかしいことになります。一度、中立性という枠を取り外さない限り、誰が担い手になったとしても、彼らに届く面白い話はできないし、非常につまらないという印象を持たれてしまう気がします。

相内 中立性は、きまった枠の真ん中と捉える



よしだ とおる 氏

ことが多いですが、枠組み自体が絶えず変動していて、その真ん中のはっきりしない。一つのことだけを是とすれば偏っていると批判されますが、どんな立場もすべて受け入れ、あとは自分で判断することにした方がいいように思います。教育現場は難しいでしょうが、新聞報道では、若い有権者に政治的価値を伝えることを意識しているでしょう。

山本キャップ 現在の政治課題や論点、選挙システムをなるべく分かりやすく伝えようと努力はしていますが、むしろ若者が現在の政治状況をどう見ているのかということに関心が行ってしまいがちです。政治の世界が自分たちの生活にどれだけ、どのように関わっているかを伝えることができれば違うのかな、という気がします。若い人たちは、自分たちの生活と政治がかけ離れた世界のように思っているのではないのでしょうか。

ちなみに、今回の衆院選で若い世代を対象にLINEを使った調査を実施しました。私たち新聞記者が関心を持って記事にしている憲法や原発に対する関心は低く、憲法であれば8%、原子力政策は5%程度です。一方で雇用環境の改善が24%、子育て支援充実が15%など身近なものに関心があることが分かりました。政策的に対立しない部分だからこそ、政権与党を支持する構造ができていると思います。

若者と政治 立憲民主が示唆したもの

相内 私は大学で「憲法はなぜあるのか。憲法

は君たちを縛るものか、政府を縛るものか」と聞いても反応が薄い。私たちの世代は、憲法は大事なものと教えられてきましたが、若い世代には憲法観が形成されていないという印象を受けます。若い世代は、憲法で保障されている基本的人権の重要性、立憲主義という考え方は何をどう縛っているかの理解、これをめぐる政党間の対立を理解できるのか。吉田さんはどう考えですか。

吉田 以前と比べて憲法教育がおさなりになっているとは思っていませんが、なぜ、憲法論議に訴求力がないのかといえば、一言でいえば生活実感と直結しないからでしょう。

憲法が保障している基本的人権や生存権、生活保障などが身近な問題とどう関係しているのか実感がわかない。日々の生活と憲法との間に補助線を引けていないからです。生活保護受給の問題は憲法の生存権に関係するにも関わらず、捕捉率が低い、行政の窓口で拒否されるなど、憲法を生かし切れていない部分が現実社会にあります。

若者と政治の関係で言えば、欧米の若者が極左ポピュリズムになぜ流れているのかといえば、やはり就労の問題が強く作用していて、高学歴でも定職に就けない、就いたとしても安定雇用ではなく低賃金であることなどが挙げられます。今回、立憲民主党は若者に対するメッセージ発信は意識的にやっていたのは事実です。集団的自衛権に対する抗議運動で有名になったSEALDs（シーolz）や、最低賃金引き上げの活動しているAEQUITAS（エキタス）などのスタッフなども加わって、戦争と自衛権、安全保障だけでなく生活

保障も憲法の問題であるというフレーミングをしていきました。若者のある種の相対的な剥奪感に訴えかけるといのが功を奏した部分はあるでしょう。政党の定義にはいろいろありますが、その一つは有権者に対する政治コミュニケーションを通じて政治的教育を行うというものがあります。教科書的な定義ですが、いまの日本ではこの政党の機能が忘れられてしまっている。こうしたかたちで若者との新しい回路を求めていくのは、今後ますます重要なことだと思います。

相内 そうすると、今回の立憲民主党の一つのメッセージの出し方は、その可能性を示唆しているところになっていますか。

吉田 示唆しているし、意識的に行っていたと思います。今回、テレビのワイドショーを主戦場にした希望の党と、SNSと街頭を主戦場にした立憲民主党は、政党としてもかなり違う性格を持つことがわかったと思います。広告代理店もバックにいたとも聞いていますが、他方ではSEALDsの運動を作っていた人たちが、立憲民主党のコアに入っている、SNSの普及の仕方、拡散の仕方など指南していました。

ただこれは政権交代の戦略や政策形成とは別の話です。ヨーロッパの極左ポピュリズム運動やアメリカ民主党のサンダース候補もそうですが、それだけでは有権者の一定以上の支持を集めることはできない。若者と政治の関係の入口にはなるかもしれませんが、そこから先は別の話です。

相内 政権交代の戦略とは、政党内部のことではなく、政党間の関係となるはずですが。一つは、

憲法意識とか憲法観がこれからの日本政治の重要な判断基準になっていくかもしれない、立憲民主党が示そうとしているメッセージの出し方や内容が一つの例になるといえるのかもしれない。

政党間の関係になると、一つひとつの政党が政

2 野党共闘と北海道の選挙、今後の政党政治の展望

野党共闘の成果と立憲・民進の自力低下

相内 次に、北海道の選挙を振り返ってみて、どのように評価しているのでしょうか。選挙戦、選挙結果を報道してどのように見えていますか。

山本 キャップ 小選挙区で自公七勝、立憲が五勝ということで、前回二〇一四年と比べても立憲・民進系が票を伸ばしました。投票日の出口調査では、自公が勝利した四区、五区、九区、一〇区はかなりの接戦という調査結果だったので、翌日の朝刊を作るに当たり、立憲民主党が地滑りの勝利する可能性もあるのではないかと議論していました。接戦となった背景は、とくに北海道では立憲民主党に風が吹いたこと、共産党と候補者を一本化できたことが大きいと思います。

それまで共産党との候補者一本化の協議は膠着していたのですが、北海道の民進党候補者が立憲民主党と希望の党に分かれたため、結果的に共産党が立憲民主党の候補者がいない四選挙区に候補

党としての体をなしていなければ、政党間関係はできない。政党でないような政党がほかの政党と連携すると、政党そのものが混乱するでしょうし、協定が守られなくなることも考えなければならぬでしょう。

を擁立して「すみ分け」を図ることができました。

複数の野党候補が出馬した二区、四区、九区では、野党候補の得票数を単純に足し算すると自民党候補者の得票数を上回ります。これは全選挙区で野党共闘が成立していれば、小選挙区全体で野党候補が八勝する可能性があったことを示しています。

ただ、裏を返せば、立憲・民進系は風が吹き、共産との連携がなければ選挙区では勝てなかったわけで、必ずしも地力を回復しているとはいえないと思います。

相内 山本先生は、共産の立憲民主への支持をどのように見えていますか。

山本 山本キャップの話とも重なりますが、道内の選挙区で野党が前回より議席が増えたのは共闘に尽きると思います。前回二〇一四年の民主党と共産党の合わせた票が、ほぼ今回の立憲民主の票になっているので、プラスアルファは特になく、共産に行っていた票が入ったので前回より上回ったというのが実態です。

表1 道内衆院選での各党の議席数

	12小選挙区			道比例区(定数8)				
	民主	自民	公明	民	自	公	維新	希望
2003衆院選	7	5		4	3	1		
2005衆院選	8	4		3	3	1		大地1
2009衆院選	11	1		4	2	1		大地1
2012衆院選	0	11	1	2	3	1	1	大地1
2014衆院選	3	8	1	2	3	1	1	共産1
2017衆院選	5	6	1	3	3	1		希望1

個人的に注目していることが二つあります。一つは二〇〇五年衆院選挙は、全国的には自民党に風が吹き大勝しましたが、道内では民主党が自民党の議席数を上回り(表1)、そのときは共産党が候補をたてても民主党が勝った。しかし、今回は共産を加えても五勝しかできなかったのですから、地力はこの一〇年で確実に落ちていと言わざるを得ない。

二つめは、一騎打ちの選挙区で、前回二〇一四年と比較して自民党候補者の票がおしなべて伸びています。激戦と報じられたので、無党派層のなかでも自民党に投票した人がそれなりにいたのではないのでしょうか。その点で、激戦でありながら立憲票の伸びが顕著だったのは三区の荒井聰さんと、一区の石川香織さんです。そのほかの一区、五区、六区、八区、一〇区は思ったほど伸びが感じられないところからすれば、本当に立憲が伸びたといえるのか、個人的には疑問に思っています。

相内 吉田先生はどう見えていますか。

吉田 北海道に関していえば、立憲民主党の相対的な勝利と総括できるかもしれません。ただ、

それは二〇一六年の五区補選から始まった野党共闘以外の選択肢がなくなったともいえます。選挙区で勝とうとすれば、まず、左側を固めた上で、一騎打ちの構図に持ち込んで、さらに無党派層にどれだけ食い込めるのかという二段階の戦いをしなければ勝てないということが改めて確認されたと思います。

共産と立憲民主それぞれの共闘の意味

相内 立憲民主党側から見ると、危うい選挙を共産党との共闘で辛勝したように見え、圧勝した選挙区はない。立憲にとって共闘は選挙戦術として上手く行ったと言えるのですが、共産党にとってはこの選挙はどのようなメリットがあったのでしょうか。共産は比例の議席を失いました。私は立憲民主党の共産党に対する態度は非常に冷たいと感じていますし、事実、共産党の二〇一四年選挙での比例区の絶対得票率は六・六%、今回は五・〇%まで落ちています。そもそも、共闘は両者がウインウインの関係でなければ成り立たないはずですが、この状態で次回も共闘体制を維持できるのでしょうか。メディアはどうみていますか。

山本キヤップ 共産党にとっては非常にメリットの少ない選挙になったとみています。実際、共産党北海道委員会の幹部からは、野党共闘をきちんと総括しなければ次につなげていかなないとの話が聞こえてきます。共産党は候補を擁立しなかった選挙区はもちろん、候補を擁立した選挙区でも

思うように比例票を掘り起こせなかったのではないのでしょうか。

共産が次の衆院選でも今回と同じかたちをとれるかという疑問です。今回の共闘はウインウインの関係にはなっていないし、絶対得票率も落としているので、今後どうやって得票率を上げるかを考えると、今回のかたちは必ずしもいい関係ではなかったと考えるかもしれません。

相内 これまでの議論だと、立憲民主党の議席確保は、共産党のサポートに尽きるのでしょうか。もう少し、立憲民主党の良いところを見つけてほしいのですが。

山本 共産党のサポートはもちろんですが、加えて言えば、前回の選挙は共産党にとっても望外の結果で、政権批判票が共産党に集まったところがありました。今回はその票が立憲民主党に戻ったところもあるので、単に共産支持者の票で立憲民主党が勝ったのではなく、元々、立憲民主党が取らなければならない票を共産党から取り戻したところはプラスの面ではないでしょうか。

相内 共産党はどれが本当のコア票か分りにくい政党です。絶対に政権は取らない政党だと分かっているのので、政権批判票を安心して投じられる受け皿の側面が毎回あります。逆にいえば、業績評価、政権評価のネガティブな票が共産党に行くともいえますが、政党間の関係として考えていかなければならない問題かもしれません。

他方で共産党は、立憲民主党と連携するなど、ちよつとだけ右側にウイングを広げて、内向きで孤立的な共産党イメージを変え、柔軟性をアピール

できたメリットは十分あったのではないかと、と見ているのですが、そのあたりは吉田先生でしょうか。

吉田 野党共闘の話は、志位和夫委員長が「野党連合」と球を投げてきたから具体化したものから、共産党は最初からその意図があったのだと思います。党員も高齢化し、組織も弱体化していることは赤旗の部数減からもみてとれます。それゆえ、早い段階で次の一手を打たなければならぬところまで追い込まれている。

ただ、立憲民主党・民進党と共産党の共闘は片務条約で、ウインウインの関係とはいきません。共産党支持者は律儀に立憲民主党に入れるかもしれませんが、立憲民主党支持者が比例で共産党に入れるとは限らない。自公の支持者の関係以上にアンバランスで、共産党には気の毒な感じもします。憂慮すべきは、このまま立憲民主党が共産党化、つまり憲法を盾に政権のチェック役に徹すること、共産党がそれを脅威に感じ、非協力ゲームに転じる可能性です。個々の政党の戦略としては合理的な判断でしょうが、そうするとお互いに負けないための競争が野党間ではじまります。野党同士が非協力的になればなるほど、実際の可能性はともかく、政権交代が遠のくことは確かです。

次に向けた野党連携の再構築

相内 野党の連携をいまの段階で考えるのは難しいかもしれませんが、どういうかたちで連携の可能性があるでしょうか。希望の党には元々民進

党にいた人が多数いる。社民党も残っているし、共産党、維新もある。どういう連携を行えば政権交代につながるのか。野党が連携できる共通のキーワードは政権交代しかないのでしょうか。

山本 野党に関していえば、非常に困難な状況に直面していると言わざるを得ません。共産党と組んだことで、立憲民主党はそれなりに結果を出しましたが、一騎打ちになって自民党も票を伸ばした部分があり、今後政権交代を考えるならば、自民党から票を奪う必要があります。そのときに共産党と組むのが合理的なのかを考える必要があるというのが一つです。

二つめは、今回、小池さん、そして立憲民主党の人たちも理念で野党を切ってしまったのですが、これは政界再編のプロセスで私たちが学んできたことと真逆の動きです。小選挙区を前提とした政界再編では、理念を曖昧にして現実的な政策で与党と勝負をし、理念が幅広くなるのは避けられないと学んできたはずですが、小池さんも立憲もそうではないかたちで野党を切ってしまった。

一度切ってしまったものを、理念を曖昧にして再結集しようというのは、有権者からも受け入れにくいことで、ここからどうやって再構築していくのか、自ら極めて難しい道に入ってしまったというのが率直な感想です。

これを取り越えられる選択肢はほとんどありませんが、唯一あるとすれば、戦術的に選挙区を住み分けて選挙を戦う「オリーブの木」しかないのではないかと。今回、選挙区で「オリーブの木」は成立しなかったのですが、比例区は立憲民主と希

望の党を合わせると自民党を超える得票数で、一定の票の掘り起こしには成功している部分があります。それを選挙区のレベルに落とし込んで候補者調整をやるくらいしか道はない気がします。

その場合は政策調整をしなければなりません、現実路線で調整するかたちしかなく、理念で再結集するのは無理ではないかと考えています。

相内 現実路線での単一争点でも、限定争点でもいいのですが、これだけ各党が幅広い主張をしている状況のなかでできるのでしょうか。赤字国債の発行抑制、世代間格差をどう是正するのかなど共通に取り組むべき大きな課題は山のようにありますが、現実的な解決策については、意外に頑固な政党の違いがあるのでないでしょうか。

山本 先ほど吉田先生もいわれたように、政権交代が起こるにはまず、与党が失敗しなければならぬのですが、その時、野党は信頼できる受け皿だと思わせなければなりません。そのためには、地道に組織を立て直し、組織としての決定を繰り返しながら凝集性を保つことを制度化していくしかないと思います。多分、与党が失敗するとすれば経済政策だと思いますが、そのチャンスを生かせるかどうかは野党の今後次第です。

政党間の共闘は政権交代の最低条件

相内 ただ、野党にとつて経済政策は一番苦手な分野ではないでしょうか。与党が金融政策で失敗したときに、だからこういう方向で行うという代替案が出せるのか、あるいは代替案を実行する

現実味を示せるのか。代替案などをどこかが準備していない限り、政権交代のチャンスが来ても交代させてもらえないのではないのでしょうか。

吉田 今回の選挙で、与野党の対立軸となったのは、小池さんがいったように外交であり、安全保障であり、憲法ですが、しかしこれで票が大きく動き政権交代が起こるかといわれたら、起こらない。そこにボタンの掛け違い、不整合があると思います。

先ほど述べたように、政権交代にはマクロ経済政策が必要で、場合によってはアベノミクスの基本路線を丸呑みにした上で、プラスアルファの憲法、外交で勝負するのはありうろと思います。ただ、右から左までウィングが広い野党をまとめなければならぬので難しく、これが安倍一強政治をつくり、裏側から支える構図になっている。

相内 野党再編と違い、野党共闘、連携を考えるとどこかに指揮者、中心となるような政党が必要だと思うのですが、吉田さんはどの政党がこうした役割を果たせる可能性があると思いますか。

吉田 たとえば憲法改正の場合は、議席の三分の二を取らせなければいいわけで、その点、政権交代を目指す野党である必要はありません。ただ政権交代のある民主主義というのが過去二〇年以上目指されてきたのだとすれば、野党共闘は最低限の必要条件です。

野党勢は政権交代を目指し、少しずつ再編や協力体制を作ってきたにも関わらず、今回また振り出しに戻ってしまった。立憲民主、希望、共産、維新との間でどんぐりの背比べをして、どこが相

対的に生き残るかということに資源を割かないといけない。

相内 先生のご指摘通り、どこかが核ないしブリッジをすることが必要で、立憲民主党が野党のなかで政策的には真ん中で、今回は野党第一党となったので、右の希望の党と左の共産党を携えて、ときには国会の場では維新とも連携を深めながら、政権交代の受け皿を作っておくということ以外に現実的な手立てはないと思います。

少なくとも今回の選挙で、野党は一発逆転を狙うとんでもないしつべ返しに合うとの教訓を得たのではないのでしょうか。

相内 北海道では立憲民主党が大きな地位を占めているわけですが、報道する側は中期的な視野でどのようにみていますか。

山本 キヤップ 民進党が存続していて、民進党道連も存続を決めて、地方組織は民進党の総支部が残っています。立憲民主と民進党はイコールの状態ですが、立憲の組織はほとんどなく、今後、地方組織がどうなるのかということに注目しています。ごたごたした状況がつづけば、有権者はあきれ、飽きてしまい、内部の足の引っ張り合いが続いた民主党・民進党時代の繰り返しになるのではないかと危惧しています。

二〇一九年の参院選、統一地方選に向けて、地方組織をどうするのか。民進党と立憲民主党を両方残していくというのは、有権者には分かりにくい。組織をきちんと整理をする必要があるのではないのでしょうか。

民進と立憲民主はどう整理できるのか

相内 北海道は今回、立憲民主党の議員が多く当選したので、与野党の図式ははっきりしたので、政党システムを考えると、難しい課題が多いと思います。

民進党に残っている議員、立憲民主党で選挙を勝った国会議員、希望の党と立憲民主党で立候補した人を応援した連合組織、複雑に絡み合うものをどう整理していくかも考えなければなりません。どこがイニシアティブを取るべきか、また、解決していく上での大事なポイントを押さえて頂きますか。

山本 現実的には民進党ではないのでしょうか。次の国政選挙は参院選で、いまは民進党イコール参議院ですし、統一地方選そして参院選で当事者が一番多いのですから、民進党がイニシアティブを取るべきではないのでしょうか。

相内 当事者はそうですが、民進党の組織はそのときもあるのでしょうか。

山本 イメージするならば、二重国籍みたいなもので、組織の母屋は民進党で、ひししを立憲民主党に貸すのが現実的ではないのでしょうか。

相内 そうすると、参院選の候補は民進党で出るということですか。

山本 地方組織の母体を民進党というかたちにしなければ、連合が推しにくいとなるでしょうし、そのときに民進党公認と過去になった政党で選挙に出て、勝負になるかと言われれば疑問です。連合も含め、希望、立憲も乗る新しい容れ物で戦うイメージしか浮かばない。

相内 それでは、解決していく上での重要なポイントは何かになるとお考えですか。

山本 民進党と立憲民主党の関係は裁判を経ない協議離婚のようなものですが、単純に足して二で割るのはよくない。北海道では比較的スムーズに両者の処理は進むと思いますが、ほかの地域では難しいと思います。

相内 でも北海道の民進党はいまの態勢で選挙を戦えるのでしょうか。

山本 キヤップ 道議、市町村議のなかでも立憲民主党に移りたいと思っている議員は少なくないと思います。衆院議員は立憲民主党だが、参院議員や道議、市町村議は民進党という「ねじれ」状態は有権者にとっては分かりにくい。

二〇一九年夏の参院選は立憲、民進から一人ずつ候補を出せばいいとの意見もあるようですが、民進党内にも「有権者に対して失礼だ」という声があります。

相内 これから先は大変だという状況ですか。

山本 民進党を解党してしまうと、政党助成金を国に返さなければなりませんし、新党に合流するオブションもないので、組織は残さざるを得ないと思います。

相内 いつまで残すことになるのでしょうか。

このプロセスは北海道の政党システムにとっては重要な問題で、この処理で失敗すると自民の圧倒的優位がつづく。民進党グループがこけると、自民の不戦勝の状況になる可能性もあります。二〇一九年の道知事選など統一地方選挙にも大きく影響してきます。とくに知事選は新人候補同士の戦

いになることが見込まれるので、早めに方向性を示すべきです。

多数になった改憲派とリベラルという対立軸

吉田 先進国の政党制でいえば、与党であれ野党であれ、既成政党は支持者へのヘゲモニーを喪失した結果、どの国も政治が断片化してしまっています。

日本も同じような傾向がないわけではない。自民党が選挙に勝ち続けているのは、公明党の協力と低投票率と野党が分断されているからです。そのなかで野党側が多数派をつくれる対立軸は、ずっと持越されている憲法改正問題ということになります。ただ、この改憲問題は分水嶺を超えたところがあつて、共産と社民以外の政党は、方向は異なれども、全て改憲を掲げるまでになっています。

この改憲を争点とした場合、四象限があるでしょう。護憲と加憲、さらに改憲の場合は九条改正を含む安保外交に関わるハードな争点なのか、教育無償化や統治機構改革などのソフトな改憲なのか、です。つまり、唯一残った潜在的な対立軸、強度の高い争点である憲法改正でも断片化していて、この状況で本当に改正のための発議ができるのかという問題もあります。ただ、大きく括れば、改憲勢力が多数派になったことは今回の選挙の特徴だと思います。

相内 いわゆる「護憲」の考え方は少数派になったということですね。憲法は一度決めたら未来永劫どこも変えないというのではなく、どれだけの

時間をかけて丁寧に議論するのか、何のためにどこを改正するのかという問題をめぐる議論がこれから出てくるのでしょうか。

吉田 先生がいわれるように、憲法改正が選挙の争点になるのは難しいけど、政党を識別をするタグ、指標になるのではないかと。そのなかで、労働組合が支持している政党は憲法改正をタグとすることができたらどうか。あるいは憲法改正の態度によつては、支持構造の分裂が起きる可能性があるのかもしれない。

憲法改正をめぐる政党の位置が明確になるのではないのでしょうか。

吉田 安倍自民党は憲法をどう変えるかではなく、とにかく憲法を変えることが自己目的化しています。直近の選挙での改正案はこれまでの自民党憲法改正草案とは、内容が全くこととなります、内容が理由もなく融通無碍に変えられてしまうのでは、憲法論議はしようにもできません。

相内 安倍政権の下での憲法論議はいろいろやっているけど、本当に狙っている方向は明らかだと思ふのです。

吉田 安倍首相に本当というのはあつてもハードルが高いため、憲法を変えることに方向を修正しています。手段が目的化しているといつてもよいかもしれません。

これからどう転ぶかわかりませんが、従来の自民党憲法改正草案を軸とした場合、この草案で第九七条自由権の削除が謳われていることは深刻に捉えないとなりません。第九七条の削除の理由は第一条の基本的人権と重複するためとされてい

ますが、基本的人権を定めたこの条文を削除する方向は、ほかの先進国でもみられるような、非リベラルで権威主義的なたちで社会を編成していくとする姿勢がみえ隠れます。

自民党の右バネに対する対抗軸は何かと考えると、やはりリベラルの理念、つまり個人の自己決定権をベースにした社会でなければならぬ。これは先の「社民の極」と「新自由主義の極」がともに共有可能なイメージです。たとえばベーシックインカムなど、個人の自由を拡張していく社会をつくるということも対立軸なりうるでしょう。こうした対立軸が政党政治でどう駆動するかは分かりませんが、社会の編成原理のあり方として、これから問われていく課題だと思います。

地域課題に対する与野党の発言と行動

相内 JR問題をはじめ公共交通網をどうするか、過疎と限界集落など北海道にはローカルな重要課題があります。こうした問題について、北海道選出の議員はどういうポジションが可能でしょうか。

今回の選挙では、北海道イシューは聞こえてきませんでしたが、北海道の課題についての報道もあまりなかったと感じます。そして選挙の結果がどう北海道の課題に反映されるのでしょうか。

山本キャップ 政権与党である自民、公明党の議員が、中央で影響力を示しながら北海道の課題にあたるしかないと思います。しかし、北海道選出の大幅議員が消え、首相官邸の力が強くなって

いるなかで、特にJR問題では「道や沿線市町村が何もしないで、国が支援するなんてことはない。まず地域が態度を見せないと国は動かない」と「国の目線」で発言する道内選出議員もいます。

今後、政権与党の議員が地元の課題、問題についてどのように発言していくか注目していきたいと考えています。

相内 選挙の結果、ローカルな課題をナショナルな課題のなかはどう組み込んで解決されるのか。そういったことが議論されなければと思いますが、いまの山本キャップの指摘は政権にインプットできる与党議員がいるかということですね。

住民の安心安全、福祉については、民進党や民主党、旧社会党そして労働組合はイシューにしてきたのに、今回の選挙では立憲民主党からこの問題についての発言があまりなく、選挙のための空中戦が多かった印象です。今後、立憲民主党がどう動いていくか注視したいと思います。

単なる抵抗野党ではない道

吉田 立憲民主党が、かつての社会党的な抵抗型の野党にとどまると表裏一体で、労働問題を含む住民の極にしがみつくことを党の路線にするのか。あるいは憲法のような問題だけに特化して空中戦を行い、護憲リベラルを目指すのか。どちらに軸足を置くのかによって、立憲との関係で見えた場合、北海道の置かれる立場も変わってくるのではないかと類推します。護憲リベラルのように小さくまとまってしまうえば、住民の極は、いまな

んでもありの自民にもっていかれてしまします。

相内 それは旧来型の社民ということですね。

吉田 そうです。再分配を重視する。

相内 社民的な発想のなかには、住民の交通権などと結びつけて、公共交通システムの新しい仕組みづくりや政策を創出していくことはできるのではないのでしょうか。

吉田 それは党派によるのではなく、自治体会での意思決定システムの改革を含めて、変えるということになるのではないのでしょうか。上から降ってくるのを待っている発想自体が隘路、袋小路になります。

山本キャップ 立憲民主党が今後どうなるかという議論に繋がりますが、選挙中に民進党関係者が「二〇〇九年の政権交代で、政権交代するには右を向くしかない」と民主党は学んだはずだ。今回、立憲民主党ができたとき、社会党に戻ったなと思った。政権交代の旗を降ろしたんだ」という話をしていました。立憲民主党がリベラルだけで行くのではなく、大事な課題だと思っています。行けるのか、大事な課題だと思っています。

相内 立憲民主党支持者の一部には社会党への先祖返り、郷愁があるのかもしれませんが。私はイデオロギーとしての社民主義ではなく、社民政権が行ってきた福祉政策を重視する。さらには人権重視といった方向性を強調したいのですが。

吉田 そのためには、労働を含む生活文化の同質性が不可欠になってくると思います。かつて、工業型社会での社民は、ポスト工業型社会に入りつつあるなかで個人を優先するリベラル化へと転

換する圧力がかかる。これがどのように両立できるかは思案所です。

相内 高齢化率が高いなかで人口は減り、一方、高齢者は旧来の福祉イメージを持ちつづけており、それを一気に転換するのも難しいし大きな抵抗があるでしょうが、しかしこれが最もコストのかかる状態になっている。政権奪取のために支持を集める難しさが、いろいろな面に出てくる気がします。

吉田 御厨貴先生の言葉を借りれば、日本人は社会党的な野党が好きだということになるでしょうか。民主党政権時のトラウマもあります。野党は政権を預ける先でも、対抗軸を作る主体でもなくて、権力たる自民党が揺らいだとき、けしからぬことをしたときに、それに向かって吠えたりお灸を据えたりするのが野党の役割だと思っている人が多い。その期待値を満たしたのが今回は立憲民主党だったということになります。しかし、その功罪も併せて考えないといけません。

相内 立憲民主党の中には、そこから抜け出そうとする考えも、抜け出さなくてもいいという考えもあり得る。かつての社会党は野党第一党でいられればいい、という長い五五年体制を保持したマインドがありました。立憲民主がそうならないことを期待したいと思います。

皆さん、長い時間の議論ありがとうございました。

本稿は二〇一七年一月八日に行った座談会をまとめたものです。 文責・編集部

北海道小選挙区と比例代表の得票結果一覧

選挙区	当日有権者	投票者数	投票率	1		2		3		4		5		6		7		8		9	
				自民党 得票数 得票率	立憲民主党 得票数 得票率	希望の党 得票数 得票率	公明党 得票数 得票率	共産党 得票数 得票率	新党大地 得票数 得票率	維新の会 得票数 得票率	社民党 得票数 得票率	幸福 得票数 得票率									
1区	小	443,008	266,987	60.27	△船橋利実 120,987 ; 46.52	◎連下大樹 139,110 ; 53.48															
	比	443,008	266,874	60.24	79,133 ; 30.05	76,682 ; 29.12	30,940 ; 11.75	22,399 ; 8.51	21,885 ; 8.31	18,135 ; 6.89	9,528 ; 3.62	3,405 ; 1.29	1,248 ; 0.47								
2区	小	457,703	261,432	57.12	◎吉川貴盛 104,824 ; 41.35		松本謙公 74,425 ; 29.36														
	比	457,703	261,371	57.10	69,577 ; 26.99	61,908 ; 24.01	37,302 ; 14.47	28,746 ; 11.15	金倉昌俊 52,626 ; 20.76	27,092 ; 10.51	11,429 ; 4.43	3,123 ; 1.21	1,135 ; 0.44								
3区	小	469,215	268,029	57.12	高木宏孝 118,961 ; 45.64	◎荒井 聡 141,680 ; 54.36															
	比	469,215	267,927	57.10	73,848 ; 27.97	72,798 ; 27.57	31,906 ; 12.08	29,876 ; 11.31	22,966 ; 8.70	18,632 ; 7.06	9,308 ; 3.53	3,531 ; 1.34	1,176 ; 0.45								
4区	小	373,655	231,440	61.94	◎中村裕之 104,054 ; 45.92	△本多平直 90,619 ; 39.99	高橋美穂 31,941 ; 14.09														
	比	373,655	231,399	61.93	63,562 ; 28.02	63,963 ; 28.19	27,777 ; 12.24	27,114 ; 11.95	21,571 ; 9.51	13,520 ; 5.96	5,764 ; 2.54	2,636 ; 1.16	976 ; 0.43								
5区	小	466,620	291,870	62.55	◎和田義明 142,687 ; 49.84	△池田真紀 135,948 ; 47.49															
	比	466,620	291,856	62.55	89,521 ; 31.21	80,805 ; 28.17	31,982 ; 11.15	31,728 ; 11.06	21,855 ; 7.62	17,951 ; 6.26	7,987 ; 2.77	3,359 ; 1.17	7,632 ; 2.67								
6区	小	431,012	256,365	59.48	今津 寛 113,851 ; 45.51	◎佐々木隆博 136,312 ; 54.49															
	比	431,012	256,327	59.47	72,282 ; 28.89	73,690 ; 29.45	29,196 ; 11.67	25,803 ; 10.31	19,864 ; 7.94	16,970 ; 6.78	6,098 ; 2.44	4,845 ; 1.94	1,472 ; 0.59								
7区	小	265,468	149,118	56.17	◎伊東良孝 95,200 ; 66.60																
	比	265,468	149,115	56.17	37,158 ; 25.49	29,377 ; 20.15	13,949 ; 9.57	18,392 ; 12.62	石川明美 47,740 ; 33.40	13,019 ; 8.93	28,851 ; 19.79	2,753 ; 1.89	1,608 ; 1.10	685 ; 0.47							
8区	小	381,321	230,355	60.41	前田一男 101,243 ; 44.60	◎遠坂誠二 125,771 ; 55.40															
	比	381,321	230,332	60.40	71,319 ; 31.90	59,497 ; 26.61	24,735 ; 11.06	25,032 ; 11.20	19,570 ; 8.75	13,437 ; 6.01	5,176 ; 2.32	3,541 ; 1.58	1,261 ; 0.56								
9区	小	398,603	239,009	59.96	◎堀井 学 108,747 ; 46.75		△山岡達丸 88,320 ; 37.97														
	比	398,603	238,998	59.96	61,266 ; 26.27	54,769 ; 23.48	40,374 ; 17.31	28,750 ; 12.33	松橋千春 35,543 ; 15.28	21,048 ; 9.02	16,821 ; 7.21	5,574 ; 2.39	3,323 ; 1.42	1,302 ; 0.56							
10区	小	305,968	199,376	65.16		△神谷 裕 96,282 ; 49.87															
	比	305,968	199,360	65.16	53,138 ; 27.41	55,410 ; 28.59	20,692 ; 10.67	25,951 ; 13.39	14,507 ; 7.48	16,107 ; 8.31	3,782 ; 1.95	3,014 ; 1.55	1,238 ; 0.64								
11区	小	290,399	185,256	63.79	中川郁子 82,096 ; 45.53	◎石川香織 98,214 ; 54.47															
	比	290,399	185,213	63.78	52,678 ; 29.14	48,745 ; 26.96	16,603 ; 9.18	15,849 ; 8.77	14,397 ; 7.96	25,445 ; 14.07	3,721 ; 2.06	2,456 ; 1.36	905 ; 0.50								
12区	小	301,508	185,371	61.48	◎武部 新 97,113 ; 54.14		水上美華 58,422 ; 32.57														
	比	301,508	185,349	61.47	56,421 ; 31.24	36,388 ; 20.15	26,007 ; 14.40	18,935 ; 10.49	12,542 ; 6.95	23,200 ; 12.85	3,631 ; 2.01	2,533 ; 1.40	923 ; 0.51								
全通計	小	4,584,480	2,764,608	60.30	1,189,763 ; 44.19	963,936 ; 35.80	253,108 ; 9.40	96,795 ; 3.59	159,739 ; 5.93	226,552 ; 8.37	21,643 ; 0.80	37,374 ; 1.38	7,632 ; 0.28								
	比	4,584,480	2,764,121	60.29	779,903 ; 28.81	714,032 ; 26.38	331,463 ; 12.25	298,573 ; 11.03	230,316 ; 8.51		74,701 ; 2.76	13,983 ; 0.52									
北海道比例区当選者				◎渡辺孝一 ◎鈴木貴子					◎佐藤英道												

◎は小選挙区の当選者、△は比例代表での復活当選者。○は比例の当選者。得票率は相対得票率、投票率と得票率は%。